

の腫瘍の生検が比較的困難であった。腫瘍の性状、占拠部位等を考慮し適切な検査法を選択することが診断率の向上につながると思われた。

#### 50. 当院における肺野末梢小型病変の開胸生検症例の検討—術前未確診例および偽陽性例—

栃木県立がんセンター呼吸器科  
森 清志, 斎藤芳国, 富永慶昭  
横井香平, 宮沢直人  
同 病理 鈴木恵子  
島村香也子

当院における肺野末梢小型病変の術前未確診8例および偽陽性2例の開胸生検症例の検討を行なった。平均腫瘍径18mm, 経過観察期間247日(肺癌70日, 炎症188日)であった。偽陰性3例(腺癌2, 小細胞癌1)で偽陽性2例は術前経皮的肺針生検細胞診で腺癌と診断された。開胸生検症例の問題点として①肺野末梢小型病変に対する画像診断能②病変に対する確定診断方法③細胞診学的診断の精度, 以上の3つがあげられた。

#### 51. 最近1年間で術前確定診断がつかず開胸生検を施行した末梢肺野結節病変の検討

国立がんセンター 尾下文浩  
山田耕三, 江口研二, 西條長宏  
金子昌弘, 池田茂人, 近藤晴彦  
呉屋朝幸, 土屋了介, 成毛韶夫  
野口雅之, 上井良夫  
術前未確診のうち切除標本上径2cm以下の15症例についてretrospectiveに検討した。内訳は悪性腫瘍7例, 良性腫瘍3例, 炎症性病変5例であった。肺野小型陰影の画像診断には従来の断層像よりThin-sliceの高分解能CTが鑑別の手がかりになる種々の所見を捕えやすかった。

## 九州支部

### □第29回

#### 日本肺癌学会九州支部会

平成元年7月6日(木)  
沖縄残波岬ロイヤルホテル  
当番幹事 武藤良弘  
(琉球大第1外科)

#### 1. 肺癌集検における間接フィルム読影に関する検討

熊本市民病院呼吸器科  
岳中耐夫, 松本武敏, 平島智徳  
木村孝文, 福田浩一郎  
志摩 清

間接フィルム読影の精度管理に関して経験年数による比較などを行なった。その結果, 個人内一致率は経験年数が長いほど高率であった。比較読影と今回試みた同時三重読影との一致率はSensitivityでは経験年数にほとんど差を認めなかったがSpecificityでは経験年数の長い方が高率であった。今後, reasonableなcheck率及び要精密率が問題と考えられる。

#### 2. 肺癌診断における細胞診の役割

宮崎医大放射線科 尾上耕治  
楠元志都生, 溝口直樹  
山田浩己, 高崎二郎, 小野真一  
渡辺克司  
竹内病院 中村 緑, 竹内三郎  
確定診断された肺癌194症例を対象として, 喀痰細胞診並びに経気道的細胞診の陽性率を諸因子について検討した。

喀痰細胞診陽性率は60.2%で, 腫瘍浸潤気管支の近位端が中枢側にあるほど, 又腫瘍径が大きいほど陽性率は高かった。特に腺癌で明らかだった。経気道的細胞診陽性率は85.2%で,

腫瘍浸潤気管支の近位端別にみても, 腫瘍径別にみても, 陽性率に有意差がなかった。

#### 3. 熊本での肺癌集検の検討—昭和63年度の成績について—

熊本市民病院呼吸器科  
岳中耐夫, 志摩 清  
熊本中央病院 絹脇悦生  
熊本県成人病予防協会

清田幸雄

昭和63年度受診者数は11323名であった。二重読影, 比較読影が行われた結果, 要精密検査者(D+E判定)は857名(7.57%), またE判定は181名(1.60%)であった。精密検査の結果, 肺癌7例が発見された。病期は0期1例, I期4例, II期1例, IV期1例であり, IV期以外は全例手術された。要精検者のうち121名が未受診であり今後の問題点と考えられる。

#### 4. 集検の喀痰細胞診陽性で発見された肺癌6症例の検討

長崎大第2内科  
谷口哲夫, 広瀬清人, 早田 宏  
木下明敏, 力竹輝彦, 鶴川陽一  
神田哲郎, 原 耕平  
同 第1外科 川原克信  
綾部公認, 富田正雄

長崎大学第2内科で昭和60年から63年の4年間に集検の喀痰細胞診陽性で, 肺癌と診断された6症例を経験した。内訳は男5例, 女1例ですべて扁平上皮癌であった。血痰は認めず, いずれも重度喫煙者で, 喫煙との関連が示唆された。腫瘍マーカーに有意なものはなく, 気管支鏡検査にて診断がなされた。全例手術が施行され, その予後は良好であった。しかし, 末梢型のものや多発例もみられ, その診断には注意を要した。

#### 5. 原発性肺非小細胞癌に対す